

了心万念備



伊勢

新成信經手記の良の月もあそび世をうけて



形も来 是より原の事も是なり

片か其の好の事と云わたり

是よりいかにいふ事と云ふけり

是よりいかにいふ事と云ふけり

是よりいかにいふ事と云ふけり

是よりいかにいふ事と云ふけり

是よりいかにいふ事と云ふけり

万葉集にもあるといふ
いふと見るといふは
大らうなりといふは
いふと見るといふは

白雲一本作住水

のみかき若くは老に
の平のりし或は形ひく玉座をぬのり
もとよみなりあつたのさのり
一經ありと殺あるをばあふと
らるるをさるる

のは世とてうへまやといふ
 世に生れしとて
 とて貴^{モミ}なるを考ふ
 人のすまぬれとて
 くいふ今の世もよ
 人のちなりき
 世とてハ
 我々よりききてとてや

○あて^とやとえあて^りあ^りせぬれと^て五^つせよ
と^うり^あや^く

○更なるべきに、永く夜を待つに
人の心と素直にして、それらの心
いそぎに、いそぎに、いそぎに、いそぎに
へと、いそぎに、いそぎに、いそぎに、いそぎに
て、いそぎに、いそぎに、いそぎに、いそぎに
古の心、いそぎに、いそぎに、いそぎに、いそぎに

譜

父伊勢守繼蔭

一諸
同說

三代實錄卷之仁

年從五位上藤原朝臣繼蔭為伴世守
 之志これ此かとて女あやゆく（工部省）
 初伴坊とて民心とせけり（下）
 後探訪事（下）院（下）（下）（下）（下）（下）
 たりせり（下）（下）（下）（下）（下）（下）

伴世守（下）（下）（下）（下）（下）（下）
 か（下）（下）（下）（下）（下）（下）（下）
 と（下）（下）（下）（下）（下）（下）（下）
 下（下）（下）（下）（下）（下）（下）（下）
 下（下）（下）（下）（下）（下）（下）（下）
 下（下）（下）（下）（下）（下）（下）（下）
 下（下）（下）（下）（下）（下）（下）（下）

あい（下）（下）（下）（下）（下）（下）（下）
 下（下）（下）（下）（下）（下）（下）（下）
 下（下）（下）（下）（下）（下）（下）（下）
 下（下）（下）（下）（下）（下）（下）（下）

元良親王

下（下）（下）（下）（下）（下）（下）（下）
 下（下）（下）（下）（下）（下）（下）（下）
 下（下）（下）（下）（下）（下）（下）（下）
 下（下）（下）（下）（下）（下）（下）（下）

下（下）（下）（下）（下）（下）（下）（下）
 下（下）（下）（下）（下）（下）（下）（下）
 下（下）（下）（下）（下）（下）（下）（下）
 下（下）（下）（下）（下）（下）（下）（下）

法皇初子に上皇
 修の扶桑略記に
 延長六年閏八月法
 皇幸石山寺京極御
 不並童親王扈從と
 あり

法皇初子に上皇
 修の扶桑略記に
 延長六年閏八月法
 皇幸石山寺京極御
 不並童親王扈從と
 あり

初子に上皇
 修の扶桑略記に
 延長六年閏八月法
 皇幸石山寺京極御
 不並童親王扈從と
 あり

戀死六其毛同曾奈何二人目他言
 辞痛吾將為或人今し月とるといと
 みとつりいそ料と難波なるといと
 ふさる小侍より月をいひけし事と
 乃一と最ふの詞よりするは其下
 〇日八んそ字を其より其流もよきと
 〇和之良の反備美流のあり一と
 〇言を延びいふとちりけれと
 〇其一方より其のありと
 〇供たり時新人すといひぬれと

頭海中^ニ立^下零^下標^下若^下有^下由^下標^下朽^下折^下者^下搜^下求^下
拔^下去^下尺^下寸^下と^下さ^下り^下し^下る^下本^下を^下そ^下る^下室^下氷^下の^下海^下
深^下を^下そ^下る^下物^下く^下氷^下脈^下之^下機^下の^下義^下明^下一^下
万^下葉^下等^下の^下字^下を^下漢^下書^下に^下引^下佐^下細^下紅^下と^下な^下れ^下
と^下難^下に^下左^下字^下府^下に^下引^下進^下ま^下つ^下て^下ま^下る^下
ま^下る^下は^下こ^下の^下あ^下れ^下と^下あ^下ら^下る^下名^下に^下あ^下ら^下る^下
し^下も^下い^下ひ^下を^下あ^下ら^下け^下る^下も^下即^下ち^下ら^下
は^下あ^下ら^下る^下書^下と^下初^下の^下書^下と^下似^下たり

譜

親王陽成天皇王子弟日本紀畧上天

慶六年七月廿六日壬寅三品兵部卿
元良親王薨とあり^{後述集大勅録}
皇孫^とい^ふる^は元^良の^弟也^の三代^{天皇}陽成
四十三年元亨七年七月從四位下元良親王
上授從四位上あり^{後述集大勅録}
無^位元^良未^だと^もあ^らは^せる^は元^良の^弟也^の三代^{天皇}陽成
十二年^{元亨}元^亨七年^{七月}從^{四位}下^{元良親王}
あ^らは^せる^は元^良の^弟也^の三代^{天皇}陽成
元^亨七年^{七月}從^{四位}下^{元良親王}
あ^らは^せる^は元^良の^弟也^の三代^{天皇}陽成
元^亨七年^{七月}從^{四位}下^{元良親王}
あ^らは^せる^は元^良の^弟也^の三代^{天皇}陽成

三才圖會

孝性

今更には金匱の要方と行状を

吉集意の
影に

傳聞する所より、おれのおと
 万をあらはせられてつるかと
 讀む孝性の出湧は、
 よ妙なること、末の世は
 まちいてつるものと、名り
 猶もあらへつるものと、

[illegible]

ありて是時の月を待てども有りと歎きて
 露之赤染のかたむくたる月をゆく哉とよ
 るにけしきと云うを物とてけしきを物とす
 云々

○今と今との君とありては後集
よそとをいひとかりたり又之を
うりんとしけり

○はかり八耳と袖と二の意あり此が右
より引いけはよりと令え又け平のより
はかり二たつと鳴るをもつねん耳の足

又、
山をもちりか
と、
之、

又、
山をもちりか
と、
之、

五、四月と五月ありて相の略を
 いふ趣へ十六日下月を以て終る
 廿三日相なり且一月第三四日の係
 ハ萬年書ニ

七月の在り夕は清く月
高きや

○顯昭古今秘法長月の相のたまふ
時々の出来人々をよめる
るに理りおぼえん害難く或は説き及
月と得出ると一板のいふやあそびのた
月口を還うけし結ぶ長月の空にあり
と海へさし込めたる凡て無常なる
と云く編みたる物語と右の説より
吟味せしむべきことなりと物に年
月と經へたりと意解ゆふ
我者ハ心持するも世にあらざる人なり

我者、
此中書、
荒上、
人、
待、
上、
下、

此時の子もあつた。方印が九道に置て、
しるしを置くがせよ、いふかりとす。時、こゝろ
母もあつた。もゝ法師の子は法師の
とす。こゝろは法師の子。又、林桑
略記、昌泰元年十月廿一日、太上天
皇有御鷹狩、直指宮瀬上、皇臨發上
勅、皇朝曰、素性法師應住良因院也。馳使
今参之。法師單騎参路頭。上皇感歎
禪師脱笠揚鞭前驅而行。勅曰、相隨者
物莫白衣。禪師稱須以假俗法。仍號曰

良因朝臣。取住所之名。曰暮宿大和國
高市郡右大將山庄也。勅曰、良禪師者
和哥之名士也。宜為有唱以慰旅懷。即
進和哥。可連時。多々々々。西宮
裏。多々々々。内子。已。屏風。多々々々。
あり。是。多々々々。

吹かす秋の草木はさるむ(出)る部(と)る
古く集秋下是貞親(と)る(と)る(と)る(と)る
る

秋乃東部此吹をへは(と)る(と)る(と)る(と)る
れ(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る
吹(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る

此(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る

赤吹丹秋之草木之芝折礼志都子
山川緒荒芝成(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る
草木(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る

秋(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る
と(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る
と(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る
古く集秋(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る

○(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る
村田春道(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る
う(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る
と(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る
や(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る
な(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る(と)る

る人とおもひ古き詞つゞけは流下のふ
も候字坊よりやういふは他者も新康と
りう(坊)のふの端でよあくる

○あふれを今ふふしゆれはあつて坊
らふの形をふふれはあつて坊
左の形候万葉集は芝折と云
万葉集卷十八は梅記客の之平礼
とあり古の記は八坊折之紐刀或は
之平利乃酒とあり坊廻紋也
阿以宇惠遠の遠と婆毘蜂倍謀の謀と

清濁あり相違ふ例あれを人故に志
は草本は萬葉集の之平礼は坊
坊とあり坊とありのやうに別

○む(い)ふまゝに古の之平礼鳥米と
あつて諸国等の字のあつては
とりて之を坊とあり万葉集は
と古の之平礼は古の之平礼
柿の郁子一名は棟和名年開今按
郁宣作棟とあれは

やくのの坊よりむ(い)ふは坊
年より万葉集は坊の字あり首字米鳥梅

此は其のこころなり其の南をとりて秋の終りも入るまゝに
そはたし終りては其のあつと云ふやうにしるはれり

譜

文屋真人ハ姓氏録ハ天武天皇皇子一

品長親王之後也といふ今つたやまをいふハ誤り

謀反して罪せられり
二品よりいふはしるはれり

康秀の母ハ先祖より

○磐神云々今集其云二條氏より其云の御
息なりと云ハ康秀の母なりと云ふは誤り

然る二條氏ハ貞観元年十二月に其御元元

子立所也ハ頭の本と云ふハ貞観十年湯盛帝

十一年に其御元元年位ハありて其御

親王にハありて其第三の皇子と云ふは誤り

七斗軍と云ふは誤り
七斗軍ハ其御元元

又寛平の御時其御元元
其御元元

たりと云ふは誤り
其御元元

と云ふは誤り
其御元元

と云ふは誤り
其御元元

と云ふは誤り
其御元元

と云ふは誤り
其御元元

と云ふは誤り
其御元元

と付はけ論ありと云

大梁子

月をたねに物に照され我々の影に影を
たす無影上先皇親王の家より今の家
一室をたねに天下の照秋影は月より
へる光なりと云ふかやとあるわが元
来は一日と云ふといふ影とありとのあ

卷之四

○これといふ所を物とある事かとも思ふ
 子而みたる之或はより易なり此は秋
 本爲一人長といふことか是之大江氏
 傳家なることか高白氏か文と書され此
 といふ事か
 古々集同類

おはなすなりとあはくは雲の巻きはせり
○ちハナの一季の訓之れの花よりと深
又西でちもいふに二つをちよれし乃
ねん佐々子と云は女例のみなり

大江朝臣八續日本紀光仁天皇元年
 遠江介從五位下土師之宿祢道長等
 一十五人言土師之先出天穗日命十
 四世孫野見宿祢^{ヨリ}望請因居地名改
 土師以為菅原姓^{ミナモリ}勅依請許之^{ミナモリ}延曆
 九年十二月勅外從五位下菅原道長
 秋篠宿祢安人等賜姓朝臣又正六位
 上土師宿祢^{オホエ}諸人等賜大枝朝臣^{オホエ}其土師公總有四腹
 中宮母室者^{桓武外祖父}具^モ毛受腹也故毛受

桓武外祖父

具毛受腹也故毛受

大枝朝臣其工師以總有四賜

秋篠宿祢安人等賜姓朝臣又正六位

九年十二月勅外從五位下菅原道長

土師以為常原姓勅依請許之延曆

四世孫野見宿禰望請因居地名改

一十五人言土師之先出天稷日命十

遠江分從五位下土師之宿稱道長等

大江朝臣八續日本紀光仁天皇元年

一とあるは是と居りよなり姓之古

木下 32

中宮丹室者桓武外祖父具毛受腹也故毛受

上士師宿衞諸人等賜大枝朝臣其工師已總有四服

秋篠宿祢安人等賜姓朝臣又正六位

九年十二月勅外從五位下菅原道長

土師以為菅原性勅依請許之ヲシメニ延曆

四世孫野見宿禰^{ヨリ}望請因居地名改

一十五人言土師之先出天穗日命十

遠江分從五位下士師之宿稱道長等

大江朝臣八續日本紀光仁天皇元年

譜

傳とあるは祖左衛門督音人と書され、名の
 文とあるは、あきなりと傳とあるは、或は
 いまのり平次郎とあるは、いづれ大板氏といはれ
 るや或人書すやといふも、今條の法親王のり比入墨腰
 と書すとすとのハ、服を法衣をぬきおほく、
 弟世二子元業、一命、十月、三、冬、強從三位行左衛門督大仁
 帝人、
 文後、それハ考ふ可也

管家

けきひに
すゝし、りあ

はなふらふ錦なり

古今集卷之十一 新旅牛在院學以少方名

○このとき牛養院に實車上皇とあり、
條の右あり、上皇は院より御出とあり、
代の左院より、冷泉院下の御経の例、
ひまうし（う）

○形ふか、有、書、と、形、
好、と、子、心、集、中、歌、御、
次、と、子、と、詠、多、一、
ナカヤノオ、ナカヤノオ、
ナカヤノオ、ナカヤノオ、

○子向山ハ集巻ノ三又長屋王駐

里の神もさうさうとふいけええは
 を供をあたへて日本紀略に桑原記等
 人々素性世を以て志すべし
 ○はまの院の庵從せられ秋の好いなり
 男其に即けられ錦いよめ代へ
 おう神也れと神のみふり向ふ事と人
 婦もこれあやとくといふ人をはるそはね
 さしとていふおき向るといひます
 是ありといふ入と意人の後撰集信の端暇
 ねたふは婦にけりねたふねみよの佛に観

續千載正統下骨之

紅毛と老と好夢とを為す要部の人
 〇山あり 如く行くは流燈集の原と極あり
 まゝあるは形人毛束事如くといふは修り
 凡そ此の二

萬物此身
陰年
のうき
なり
と
嬌る

○好子とるあはれ好子とるあはれ

あせねと
万平之石橋
と云ふ

方學子不務
上之義甲

口ぬきいふに
子受の情布
を正解す
置

五万石に於てハ格別の高き相付を

譜

菅原朝良大枝朝良と菅原朝良上り
父參議從三位是喜卿弟三也菅原朝諱
道真字三貞觀十二年對策及第官多
帝侍讀昌泰二年右大臣方四年正月
廿五日任太宰權帥坐事也平延喜三
年二月廿九日丙申從三位太宰權帥
菅原朝良薨於西府九十九三代實
錄乃こ紀男按察院記公曆文以こ菅
原朝良こ荒涼のここたひこ祖上人

の御事と云ふは、その例は、
 正暦五年正月廿五日宣命令焼却之
 勅號天滿天神一日延喜元年閏四月

是よりとよひにせむうつけかきまゝに
 物なれと素性あるものむむか
 へも書くとせんとあゝあゝ

譜

父内大臣高藤公男二三條右大臣定
 方公長延二年正月大納言を任左
 大臣兼二年八月薨日中

日中
桑名

百人一首古説卷第三



負信公

小倉山の好力とありて心あり今一度の事

拾遺集雜秋亭子院寛平大井川の

孝今上行幸といひ上皇とありて孝とありて孝とあり

のありて行幸今上延しありてありてあり

ありてありてありてありてありてあり

とも五虎君と云れど
試みの官位ありき

氏が書きたるものとさうなる法をいふ
 延喜二六帝の法を節の即ちの法といふ
 といふをいふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 下に論をいふと云ふ

日哥の心を此情の物なり
 今いかに常なり是上より
 行なりとひるも
 けきいひるも
 今より

極るやもいふを不深く付て
 夏六帖の思房朝臣とてなりて
 ちやいふはあそひの集むる迄は

是がてしなく終るといふ
るに、字集九秋、今、皇子を

真山志散過古華三臨山者予令君

侍
卷
五
新

[illegible]

譜
基
忠
平
世

父大政大臣昭宣公經也身信公

經基也負信公忠平正

公忠平

証

按家集賴基之
けり歌歌

作者實之躬恆忠孝是則

伊平等之性不覺賴基八欲

○大井川行幸和歌序古今著聞集 云ありれわるる

御代長月のりと鳴る鐘の聲を

惜却飛鷺行船去

の梅雨を所^の船^のひて夕月夜とて

山をぬくと此席は九首の歌句と
あともう一首の歌句とを

ありのちを略す

[illegible]

杉花より紅

頼菴集 芥川亨孝子 左馬頭

其れ中より高きとやうに
 せられしものありて
 才造 上子 延 市 対

楊道長延壽師

大井川子行幸あり人々を驚かせし事

費之方并に返のわらふと云ふは、
是より来と云ふ方より云ふと云ふは、

大徳寺
新開書院
少子
小女

十人共事あり、乃ち之を以て和合の事

清中不懷安勿以子題也

喜日席敷費之如左

是も此書と此書とを別の所とし
 且行春と太教有影の書をも合し

張小女集天法皇西川歌一首并日

新洲より子と云ふ

又高麗の猿山のかみきり

顯照注曰竹軌永
御曰西川即大井
川也齊王西川の
坂と云ふも大井川
の事也

右の諸書は是れ御あり 行幸の殿を
みえり 古今集は是れは古きと云ふ得字
あり 中よりこれ等記書の上近き七年
九月十日奔川行幸とあり是今日、
行幸之始大京集今上と突合をとり
侍人を倒の侍人ありて是れ古きと云
へり 物右は御記書の末の記に近き七年より
と云ふ所の記に人記記に云ふと云ふ又今集より
世に云ふ所の記に人記記に云ふと云ふ又今集より
古きと云ふ所の記に人記記に云ふと云ふ又今集より
後等撰あり人古今集は古きと云ふと云ふ

やそれよ違へ書ふ却て授ある所なり
又これと云ふ所をとりて云ふ所なり
ては古き所の記に人記記に云ふと云ふ又今集より
古きと云ふ所の記に人記記に云ふと云ふ又今集より
古きと云ふ所の記に人記記に云ふと云ふ又今集より

やそれよ違へ書ふ却て授ある所なり
七多のふ二年の日は是れ古き所の記に
よけふと云ふ所の記に人記記に云ふと云ふ又今集より
古きと云ふ所の記に人記記に云ふと云ふ又今集より
古きと云ふ所の記に人記記に云ふと云ふ又今集より
近き七年九月十日奔川行幸とあり是今日、

行幸あらばなれど人なとよりく侍
 依りて侍るはこれ御座りし事
 廿三子あり
 或同日は小倉山より子孫連集一條大い
 し大和物語も忠平公乃極右と
 書けるは年時小けい福ありされとも
 中々此とありし依りて上卿と見え
 大御意以上の時ありん。然るに延喜七年
 以前一二年の間ありしに其公いふに
 四位の右大臣と侍る延喜七年日本紀実案御り
右大臣位に侍従とあり

い

答曰是右大臣とありし御座りしは
 右大臣と依りて上卿とありし事あり
上卿は左大臣の時の大臣と
執事と依りてありし例あり
 官よりいふ侍るは源氏物語なるもの上
 道徳なり。此大臣の四位とありしは又
 之が是とありし侍るや。かぬといふと
 くらゐ今侍るは七とありし侍るは
 之と執事なり。然るに侍るは又今侍るは
 侍るは又今侍るは又今侍るは又今侍るは
 月八日の所の御座り侍るは又今侍るは

○やうと涌也泉といふ料之泉川を
何時かきとわすねしと料のうんき金
く序之見きしやいふ泉の及之史泉の
決る即る去つたをわすこ

○武後乙未出てもう泉といふ川といふ
と泉といふといふ泉といふ泉といふ泉
のうんき金といふ泉といふ泉といふ泉
決るといふ泉といふ泉といふ泉といふ泉
中ねる泉の序といふ泉といふ泉といふ泉

あはれは泉の序といふ泉といふ泉といふ泉

譜

祖父内舎人食國令副父花中將利基高藤

兼輔卿延喜廿一年参議在帝將延長五

年從三位為中納言五十八年兼右衛門

督美平三年薨五十七以上後探集子兼輔朝

臣あはれは泉の序といふ泉といふ泉といふ泉

と、乃あはれは泉の序といふ泉といふ泉といふ泉

延長年十二月あはれ美平年二月海平

臣大京大夫正四位上天慶三年卒

抄

李府云云物恒又字名院の花面白く

比南院の五のみとふしう流集見ふ

とく

来へまといへや先代はしる

とつり南院を拾芥あり是忠親王

の子とあれば其れ子なる

凡河内躬恒

ふあふとやふ人初あかき海とぞ白葉れ花

古今集秋下 白葉れ花とぞ

あふ葉れ花のふに秋の露のそと

朝はいつとてと見もとをさされと

まふとてとみえやたやとて

人へ目花とて露も魚とて

はらふふの感あへ

ふあふとてとみえやたやとて

須集

いづれの時や足るをしのの寂しきまをぬ
おしといたの奇よりよみたる物なり
いふあんとし兼も寂し物なりとて
しとて是れ兼も人なりとて

○さうさういふとては乃心乃心
てまはるゝとて或はまはるゝ
とていふとては乃心乃心
いふ人なりとては乃心乃心
いふ人なりとては乃心乃心
いふ人なりとては乃心乃心
いふ人なりとては乃心乃心

やのてふとては乃心乃心
いふ人なりとては乃心乃心
いふ人なりとては乃心乃心
いふ人なりとては乃心乃心

島傳足速乃小舟風守年者也經南
相常齒無二この年とては乃心乃心
粒さあつては乃心乃心
とては乃心乃心

○初霜初霜なりとては乃心乃心
念及和毛月令云季秋月是月霜始降
とては乃心乃心
とては乃心乃心
とては乃心乃心
とては乃心乃心

附たりと云ふはさのこが子とては
人の居切なるなり

音

凡河内古史記云天津堯都

是河内國
造等祖也

日本紀も是の又日本紀大

性爲民

國書ハ封建ニ中古郡縣ニ有リ如キ事

建の時國と成務天皇以來の国とい大

小
子
う
て
わ
れ
も
國
の
ま
ん
な
今

子何の國のうちの二を傾きおれ何の

國造と稱す所曰姓氏録ニ凡部氏あり

これと性質を
凡氏の内にも
蘊我

小田氏を
のり多し
之を
何れ
何れ
何れ

以爲

の躬恒姫の父祖未詳古く桑原が常用

雙少育 サリハシ
 親雲三代格上國子抱右衛門
 少弐甲斐上國子目從傳
 後撰

集玄淡路のよりふとんと任を
とて
ふとんと

亦同集工御厨子所乳之清紙の任え

乃か屏し時の高き老朽すといふ同書

延喜の御時殿上れふこと此中上段

西より一と一は反對して氣に（か）
 見えたる親とや世あらをいふ所
 明く月のはるけく下りて世をうへあふ
 せせたりといふ世のよきものとおけるは
 別れは海を渡りて京の都といふ人の名
 は冠帯とおもひに映といふ詞を合せる
 ねといふ巧なるもの
 のみなりといわれ時をいふはしめられ
 下にもいふはねといふはしめられ
 世のあらは別れといふはしめられ

のけあのをとるは親といふ義にあまのうら
 とけあのをとるは親といふ義にあまのうら
 ありきといふはねといふはしめられ

あまのうら
 ありきといふはねといふはしめられ

け編次をよみ足解をよみあてめはしめられ
 後を解のしめられけあをよみあてめはしめられ
 のまはあれといふはねといふはしめられ
 人のねといふはねといふはしめられ
 とて言ふ言ふといふはねといふはしめられ

譜

のけあのをとるは親といふ義にあまのうら
 とけあのをとるは親といふ義にあまのうら
 ありきといふはねといふはしめられ

壬生臣ハ姓氏録云天足彦國押人命
後也壬生部公ハ崇神天皇之後也以
二流乃ち唯壬生とありハ彦國押人命
也

の主生大和國者野原ふあ地ふまをせり
二三漢音
 氏を——目ふみ子と号す 主ハ水の義
二三漢音
 とて訓せらるや新恒集の詞ふ衣延喜の所時
 ふあゆの忠太ふお母やは使えはふれふ子
 一のふまを——いふとふれふ和えおり
 土佐國安藝郡丹生二筑前國上座郡主生

布といふ丹生、勿論土庄と書ても尔布といふ
手は音るれ、丹の字書て小假借せ
る。一丹生、赭土乃あるをいふれ
ともくまれきなり。屋うゑと免あるを
拾芥の門路の條に引く。又福川幸民
此證するより号へとせば、とやみよ唱
し成。

○計明公父祖未諳三代家譜亦從舊
 法以爲監主生直成之子人有親族也
 ○古今集序子爲府生以生爲一條小

形て後置先之の下小只の符集を
 宣統の十望先道要書なりを述に同
 集をある道き事より身なりと許り秋
 の末のふあむむわんといへば後集
 もたのばのあせと侍り先をたえ

う(と)男(と)女(と)と
 ち(と)古(と)の(と)倒(と)之(と)目(と)は(と)
 ち(と)の(と)わ(と)く(と)ゆ(と)

坂上是則

能くしめぬ月とるるまふ老成の思にあらるる

古今集々 大和の玉まあわたり時子宮の子
 万(と)り(と)と(と)え(と) は(と)ち(と)ま(と)し(と)勝(と)里(と)とい(と)ふ(と)あ(と)る(と)も(と)あ(と)
 の(と)ま(と)ま(と)る(と)時(と)よ(と)と(と)あ(と)れ(と)い(と)ふ(と)の(と)
 ち(と)集(と)の(と)あ(と)ふ(と)ち(と)の(と)あ(と)る(と)
 雪(と)の(と)勝(と)の(と)あ(と)ふ(と)に(と)は(と)る(と)え(と)い(と)ふ(と)は(と)れ(と)る(と)
 ち(と)人(と)の(と)い(と)ふ(と)ま(と)ふ(と)け(と)と(と)る(と)ふ(と)あ(と)る(と)力(と)と(と)ま(と)ふ(と)
 ら(と)人(と)の(と)ほ(と)け(と)の(と)雪(と)の(と)を(と)よ(と)ま(と)ふ(と)く(と)い(と)ふ(と)中(と)
 お(と)か(と)る(と)を(と)い(と)ひ(と)あ(と)に(と)ぬ(と)る(と)も(と)あ(と)る(と)は(と)れ(と)の(と)お(と)
 を(と)ま(と)ふ(と)を(と)よ(と)ま(と)ふ(と)下(と)み(と)と(と)より(と)心(と)細(と)く(と)あ(と)る(と)
 勢(と)を(と)い(と)ふ(と)果(と)つ(と)と(と)れ(と)い(と)ふ(と)花(と)の(と)人(と)を(と)る(と)も(と)重(と)
 の(と)ま(と)い(と)ふ(と)し(と)と(と)あり(と)あ(と)い(と)は(と)れ(と)は(と)れ(と)の(と)

かきおさる

○あやゆけねほあけこの阿反なるを
小二廻相通てつけとよる——或は
二ねんときをねりけのりとせう格因
なるといへばさし傳へられといふも朝霞又
安佐此良伎許勢豆天久禮波ねもあ
るに皆ね出乃冠錦小田ぬれねい
らふといふ語ありねのりかき通えおるもね
る——
海船のふもねんききりおとあさ
ねはきよあはけとちぢいねる——
○みるまゐいふとねのうのきえい、いふと

事也

宇比万奈比まゐるまゐるいふなりといふ語とて
ねといひんうりともまゐるいふのりねりぬ

いけきとねきとて半流例の子とよおとを
ねるもさうおふとさうきききき編集
ねんきえいふ——けききねんききさ
七首五十六あ、載られたまはねききき
ねんききとねんきききききねんきき
くねんきききききききききききき
編集ねんきききききききききききき
ねんききききききききききききき
もねんききききききききききききき

相承有るものなり月ふまふ人た有るなり
拾遺集道海

能く事を思ふてをんけせふとて月を
光にあらせしむるなり
れとふにけしむるなり
候の事と引ハるるなり
後をひきかたてはふとけれおきふと
とれ

譜

坂上宿祢三代實録云貞觀四年六月

左京大前越前介外從五位下坂上伊
美吉能文大等女先從六位上坂上伊
美吉斯文等九人賜姓坂上宿祢後漢
孝靈皇帝四代孫阿知使主之裔与坂
上大宿祢同祖とて因村の馬の流大
宿祢は是則けい津市に坂上との
付れ給ふ九人の流とて是也

○是則けい父祖来詳拾遺集云大内記
職多令三掌造詔勅凡御所記録し出れ傳ふの補を
位正六位上也の蓋傳ふなり
耶葉書云延喜五三九御仁壽殿召殿上人及藤原重之坂
上是則帝の長在原相如帶刀模井清卿令蹴鞠二百六度

揚不墜召内苑諸給文おれふ
そるるものなりしむるに

春道列樹

山川の風をたづねて
古今集秋下 志賀山越えしとある
山川乃甲きありけりちりちり本れ果の
光りうくくは流もるぬよれを吹
のれは嵐をいそはれと極くや見え

あつちの鼻を因のかけろ志賀山とありけり
さるるものなりしむるに
下りしとありけりといひ解に
とありけりといひ解に
とありけりといひ解に
け山川のつちを濁る
とありけりといひ解に
孝徳紀に耶麻我波爾鳥志賦陀都威底
とありけりといひ解に
依は奉流といひ解に

[illegible]

是と聲伸張いことやくまゝにふりて
中人様よりく穴と聲の内にぬく空形
取らねど一なるや思召しつゝも付人
とふといふ物より付るに要し
付れども、沈黙されしを得られしを
しり

○此のちて無聲也されも本流を
下へ下より下へあると云ふといひ
下より下へ下へあると云ふといひ
下より下へ下へあると云ふといひ
下より下へ下へあると云ふといひ

ちてのちてれもよあるも
人の心と云ふ所のつぎのと
よく考ぬ説のちてのちて

○此の或説はちてのちてのちてのちて
いふれに想て中人様より付るに要し
けれよと下へ下へあると云ふといひ
中人様より付るに要し
おのづからいふにやれども疑の詞とて
尺をいふ説あり是は似て飛つてのちの詞
と入物けあるも中人様より付るに要し
疑の詞とて

神皇正統記の巻二のふはあき
ておきふまゝにふくまひておき
は千餘首ありそ二とあり

別とせといふもあきふまゝに
神皇正統記の巻二のふはあき
又とあきふまゝに

山のみはふまゝにふくまひて
あきらふまゝに

あきらふまゝにふくまひて
あきらふまゝに

あきらふまゝにふくまひて
あきらふまゝに

譜

紀氏古く記云建内宿称之子并九

木角宿称者木臣都奴臣坂本臣祖

あきらふまゝにふくまひて

友則の父祖未詳一説は富角か

有友子也とあるは友のふまゝに

且同集は友則の父のふまゝに

ととのふまゝにふくまひて

量、やすして引書とせんは流に答ふ
あれ論も巧みれとすゑを人ね
童一も付れもどくしむる子之
の文今集序左内記に是儒志の官今
下西交折等なり其職孝行あり且古
今集よばくしは侍りて時より通れり其
うちまるとあれはつての目なりやあらん
死々今集撰の中よりけり哀傷の部にも

藤原與風

詠る人少く
多し
なり

友集新上

魁序

いゝも老をて世のまじりの友の人
 子ああるをにほひ今ふれとも友と
 してかいら飛あまもて人あふふ神とし
 子ふとも思へ老うわのけりわ年ふら
 子ふれとも思へ老うわのけりわ年ふら
 子ふれとも思へ老うわのけりわ年ふら
 子ふれとも思へ老うわのけりわ年ふら

まじりたるなるをいふ今にわすれ
老のなるをいふ老をいふいふ老をいふ
のなるをいふやうにして世をいふやうにして人をいふ
いふやうにして世をいふやうにして人をいふ

いふやうにして世をいふやうにして人をいふ
けれなるをいふ

或はいふやうにして世をいふやうにして人をいふ
やうにして世をいふやうにして人をいふ
やうにして世をいふやうにして人をいふ
やうにして世をいふやうにして人をいふ

といふ顯眼をいふ顯眼をいふ顯眼をいふ顯眼をいふ
といふ顯眼をいふ顯眼をいふ顯眼をいふ顯眼をいふ
といふ顯眼をいふ顯眼をいふ顯眼をいふ顯眼をいふ
といふ顯眼をいふ顯眼をいふ顯眼をいふ顯眼をいふ

此説をいふといふといふといふといふといふといふ
の元は相おいのやうにいふといふといふといふ
いふといふといふといふといふといふといふといふ
の文皆是なりといふといふといふといふといふ

いふといふといふといふといふといふといふ
いふといふといふといふといふといふといふ
いふといふといふといふといふといふといふ
いふといふといふといふといふといふといふ

此はまゝに信ずる人
は後やとて見しとて
日く文をいふよりみ
たりとていふと信ず
る人といふ人といふ
なり

は等とありせむ物か信の信を
たふすめとてふまゝとていふ文も
目出づるの山のおとどきとていふ文の
らるは世に今も集ふとていふ文の
海を以ていふ限りたふすめとていふ文の
人よりいふとていふ文の解を以て
うぬとていふ文の又相老の文を以て
のことあるとていふ文の引を以て
ある文の文を以ていふ文の引を以て
とていふ文の引を以ていふ文の引を以て

いふはまゝに信ずる人
は後やとて見しとて
日く文をいふよりみ
たりとていふと信ず
る人といふ人といふ
なり

譜

父道成成男 号院藤太下總権大掾延
喜十一相模掾従五位下
抄 果又古書

大和國長谷寺是長朗先祖川原寺執
行法師位道明靈龜年中藥其同類奉
為國家所建立也靈像殊驗之からて

やいふとやうなものと云ふ

○此と云ふは、集集其處と云ふ此と

やと云ふは、一

○たゞと云ふは、神代書に所植湯津杜木カクレノキ此所植

古今集カク男山カクあつりとあつと女部

部といふやうな水の庭と云ふ生えあ

梅の本

○此書を宿坊に云ふは、何と云ふと云ふ推
考の便にけりある何故と云ふは、

譜

紀氏に云ふは、云々云々の系譜或説曰

武内宿禰より十一代紀本道孫望行と云

此説未詳然祖に武内宿禰の男木角を

行なれども初子又他氏も此説と異なると思ふ何れの

流より云ふは、云々云々の位なる人の

傳に云ふは、官位に云々集集御書

所預西宮抄云在式乾門東廐有預書手和名抄云蘭林坊

在式乾門東今分為御書所是也拾芥抄云侍從所南

有公御別當
預并書手

作老部部云天慶八年三月廿

八日任木工頭月九年卒

後世修持院の宗
師ともいふ

出づるにありて本工持頭と云ふ可
なり

平賀
盛也

○新撰和歌集序云玄蕃頭從五位下

此頭令云當時佛寺僧尼名籍蕃客詳見譙樓及在京夷狄驛當
館舍之事と見え入るる才学あり仕らるるに
延長八年十月

小京と云へ兼平五年二月土佐より
うり由ち依の跡を名甲年甲午の仕へ

○定家公云昔父之歎人たふたも及ふ

一詞下と云ふりし事と云ふと云ふ

賦詠の神と云ふ事と云ふは

中は
風貌
人たふたも及ふ

うりはと云ふ雅なる事と云ふは

此等物之古今華と云ふ事と云ふは

と云ふ事と云ふは

と云ふ事と云ふは

と云ふ事と云ふは

と云ふ事と云ふは

と云ふ事と云ふは

と云ふ事と云ふは

○和文公云此の本化と云ふ事と云ふは

と云ふ事と云ふは

付れとけし唐文をうてん文體を
 せるとあるふしも和文をぬき
 一書をとりあへるは止のふり
 事あるを考ふ人万々あり侍
 古文のついでに和文を記し
 されども和文のふりも
 るふりもあつて和文を記し

清原深長



清原深長の歌は
 更なるものなり
 月よりさき
 天のついで
 月よりさき
 天のついで

古くは月夜の
 けしきと
 公鳥一首
 なり
 さの
 月と
 人々
 あり

意をなすに^したれどもいふまゝと

おとそ^しあり

高方集

おとそといふまゝとて
の親のまゝといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて

おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて

おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて

おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて

譜

清原真人^ハ性公孫云敏達天皇孫

濟王後也

即ち^ハ百濟親王とあれと敏達帝の孫とす

今^ハ信^ハ字^ハ所^ハな^ハされ^ハ從^ハい^ハく^ハ國^ハ也

他の皇子も^ハ性^ハを^ハ賜^ハふ^ハの^ハ國^ハ史^ハを^ハん^ハえ^ハる^ハ

おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて
おとそといふまゝとて

舍人親王五代孫^ハ有^ハ則^ハの^ハ男^ハと^ハを^ハ始^ハる^ハに^ハ據^ハの^ハ

且從五位下とあるなり

初學は三代孝元天皇
秋岡王と稱せし
原真人品舎人親王六代之孫
又云は王の中子房則と云
なりある

文屋朝康

皇御孫のふくむ秋津波のふくむとあるなり

後撰集秋中

秋風のふくむ吹くふくふく
も隠れておぼろしくも秋の光十海に
横し出たるふくふく吹く

幼少の吹くふくふく
吹頻とあるなり

とあるなり吹くふくふく吹くふくふく

吹頻とあるなり

や行ぬと云神代は重波とあるなり

訓也とあるなり

今せん

吹頻とあるなり

物あるとあるなり

白とあるなり

父祖未詳或説は文屋康季の子大隈か近
光孝天皇仁和寺也延喜三年大舍人
と傳ふ所のちよ出立といふか否を
仁知の所とあるも傳ふ所をたれ
寛平の此ふも傳ふ所の年とも
これぬ^ね佳^佳の比を延喜の傳ふ所
人形一

初より後と云ふ
つら

右近

わすれ^すた^たも^もあ^あひ^ひ下^下人^人の^の情^情を^をた^たぬ

拾遺集^{拾遺集} 巻^巻之^之九

よすれ^すた^たも^もあ^あひ^ひ下^下人^人の^の情^情を^をた^たぬ

わすれ^すた^たも^もあ^あひ^ひ下^下人^人の^の情^情を^をた^たぬ

よすれ^すた^たも^もあ^あひ^ひ下^下人^人の^の情^情を^をた^たぬ

よすれ^すた^たも^もあ^あひ^ひ下^下人^人の^の情^情を^をた^たぬ

よすれ^すた^たも^もあ^あひ^ひ下^下人^人の^の情^情を^をた^たぬ

よすれ^すた^たも^もあ^あひ^ひ下^下人^人の^の情^情を^をた^たぬ

よすれ^すた^たも^もあ^あひ^ひ下^下人^人の^の情^情を^をた^たぬ

二月浮撰集位時

儂^おと月^{つき}を^をま^まに^に我^{われ}を^を捨て^て君^{きみ}を^をめ^め
 同^{どう}輩^{はい}の^の人^{ひと}の^の心^{こころ}を^をめ^める^るは^はた^た

[illegible]

けちふてしゆー男や
いひゆる
大新あつた山といふ古くありと
おるを毛いあらうかありと

○ばちふてしゆー柳ありしと

いちふてしゆふ

大和歌傳子世傳と故中納言と
おろそきにあつては御事ありと
いひ傳ふ

○ばらみてし物ありしとて

此書をあらうといへば
 ちやいへばいへば
 なり多利の物か知
 ると轉て成とい
 へりそとて登俣の
 物か知るやと直に
 ちやいへばいへば

○大和物語は男の王女といふものなり
てちひせれとすれはまほしといや
とん山あふふなりと物に詞をいふ
へるにて傳ふ事なりといやとて
とて

いやらえをふこちをふまゝいふふ
くせえ何々

言普

直作の未子葉の子え
 又野少將りて者大系圖作
 部類下

言
父太初物はよき縄が持ひしよ右近故屋
常より此より此より

或揚子江安を

七條所穩子といふと七條所海子に寛平老
みちも七條所と云ふ所あり七條といふは
まういふなり

4
1
3
2
7

糸織事

は第の少の藤の如く思ふに傳へる人の言

は深き人

先其介量はより少の藤の如く思ふに
人言ふやい人言ふに
くえ一二の言はるに藤の如く思ふに
言ふに人言ふに
何とてを傳へるに

やうと傳へるに

いふ言はるに
は言はるに
紀の神は茅原と
之を言はるに
伝へるに

○は茅生の言はるに
是は茅生と
之を言はるに
麻原乃下草の如く思ふに

例不^くはあれ^は是^ももぬ^と訓^し神代卷^よ
 栗田豆田^もあ^るあ^るを訓^し神武紀^も
 阿波赴^り耳破^介弥羅毗^言茂苔^とあれ^も
 も^は形^は是^の
物字^も生^と後^人字^のこ^も唱^し言^便なり
 さ^くあ^る小^の野^とい^ふ人^料あ^るは^は藤^束ハ^まと
 小^の藤^束の藤^束の藤^束は^あ物^はは^は茅^は
 小^の藤^束は^生れ^は物^はい^ふ人^料は^は物^はも^も
 藤^束も^も人^料の^はえ^は其^は名^はお^も付^く
 是^は藤^束は^まと^いふ^は人^料は^は空^の二^り
 二^り

物字^も生^と後^人字^のこ^も唱^し言^便なり
 さ^くあ^る小^の野^とい^ふ人^料あ^るは^は藤^束ハ^まと
 物字^も生^と後^人字^のこ^も唱^し言^便なり

小^の海^はは^は物^はの^はと^は訓^しを^も
 是^は物^はも^も散^分て^は
 月^もさ^うち^は二^り葉^は葉^はハ^まと^いふ^は今^も
 葉^はも^も隠^はる^はも^もあ^るは^は二^り
 引^はる^は人^は一^りあ^るは^は二^りあ^るは^は二^り
 今^も二^りあ^るは^は二^りあ^るは^は二^り
 二^りあ^るは^は二^りあ^るは^は二^り

譜

御子

按^は祖^は天^は皇^は一^は世^は源^は氏^は大^は御^は
 弘^は御^は父^は中^は御^は者^は御^は
 希^は卿^は扶^は桑^は昭^は代^は之^は光^は
 王^は正^は十九^は卷^は五^は十^は四^は

奥義抄は古事と新事とを

意にまじりてぬるをいふなりとて同
しとせられぬに事あるの事とぬすれぬ
事ありはけりぬるはけりあり

譜

平朝臣桓武天皇皇子一品式部卿葛
原親王男從四位下高棟王太長一年
閏七月賜平朝臣姓貴太京是始也兼
盛河内大系國公祖父興我王光孝天皇二世父平
篤行袋草子云兼盛永以王公為大君

天曆中之海平姓今按本朝文輝は
長八天曆四年越前守秩滿は散
位より七年天曆五年上書して勅解
申次官兼國公親の國と議を承文
中より兼盛は目入学多年編蒲適奉寮
試已以及弟より總關氏爵に付時何
の位よりあること天曆五年より後上
よりあるはけりぬるはけり大監あり
補せしむるは後天久二年より後
何守と申す文は後上大監朝平親王兼盛

とんてうげのさうしうやあまよすれを
あつてけりえ平島の子あつて已に王氏
に停られと兼冬といふ王氏と稱せや
別物とて二度王と稱す程あり記保傳
にも見ゆ是又平氏を稱りて鼎をもすや
うるうとて太の申ふ程もとるにちひと見
えゆをもあつて後醍醐王といふと兼冬
王とあらむと附名を誤らうとて兼冬
漢王と書誤れどもあつて仲つとありと
らとせられ兼冬多きれんといふと

い袋あふふ天徳を合と仰り実なるものを
かゝ村上天皇とてその中ふ天徳といふれ
いあふ中に世々の御時よりや拾遺天皇
い天徳の御時といふも拾遺

壬生見

多すて我々いふもさきよりいふをえんやあま
拾遺天皇 天徳の御時 壬生見
天徳天皇
壬生見

是の海やりのれりやふて甘み感
好むれん今もあまのぬめりと
くふれとかいのゆとたみ難うてけ
れたのいふと良座あうりまなふ
集むる乃侍と忘れぬやうに

父忠岑也家集子内の信少と云父忠岑
の歿後其の爲ふ書問の爲る

中とありて其の昔の今よりいふまゝなり
 思ふはさるゝと云ふことありて其の

或説は天徳二年孫中書大目と云ふ家集
に執筆人下道と云ふ文云伊豫に在り
よしあるうき通めの

高きて月小半、足ぬ播磨のそとを
ふりこ

7

年四月八日
初学子出の園にてりーとて園友といはれ元来親友なり
 是よりして筑紫伊豫播磨なるもの傳へし
 於て又後集よりある今時分て由余に
 伝ふところ道場よりおゝ家業を承けな
 りなるも此傳の面よりす人となり及ぶ處

せしめしむるに耐えよとていふも
 多しとていひよのちふとていふはのちと
 ましむるなり

流石元輔

世にたふさふとていふも耐えよとていふも
 多しとていひよのちふとていふはのちと
 ましむるなり

世にたふさふとていふも耐えよとていふも
 多しとていひよのちふとていふはのちと
 ましむるなり

流石元輔
 せしめしむるに耐えよとていふも

初めは是と云ふ
つと云ふはと云ふ
あつたをと係道
取例はなりと云ふ
古事記万葉集
里とあるは

○かゝる人々自と云ふ

○志保つと云ふは云のなりと云ふ

○と云ふは云のなりと云ふ

○と云ふは云のなりと云ふ

○東の村は云々

○思ふは云のなりと云ふ

○と云ふは云のなりと云ふ

○かゝる人々自と云ふ

○と云ふは云のなりと云ふ

○と云ふは云のなりと云ふ

○と云ふは云のなりと云ふ

○と云ふは云のなりと云ふ

○と云ふは云のなりと云ふ

○と云ふは云のなりと云ふ

○と云ふは云のなりと云ふ

○と云ふは云のなりと云ふ

○と云ふは云のなりと云ふ

○と云ふは云のなりと云ふ

○と云ふは云のなりと云ふ

○と云ふは云のなりと云ふ

○と云ふは云のなりと云ふ

此の所 居を居と
おしるるなり

譜

祖父深喜父又顯忠下野輔肥後守と
奈馬よりなり相記と考順業之天
曆五年よりなりやと考元と考
ふら終てとき元と考女と考
河内掾と考又奈馬統領と考河内
と考又又奈馬と考奈馬と考
他存より又奈馬と考一拾奈馬と考

六月辛七と付れり又後より人なり

松申の教忠

道より後松よりなり松よりなり

松よりなり

あしぬるの物なり松よりなり松よりなり
松よりなり松よりなり松よりなり
松よりなり松よりなり松よりなり

ゆゑに政をあたひしむとて人々を治り
けりとの説の解れ難きをいふに
人々を治るは中納言西のては通なり
南相のては父の政をなすべし
と云ふ

いふに政をなすとはいふに
人々を治るは中納言西のては通なり
と云ふ

譜

公卿補任云父木院充大臣時平母在原棟

宇治系備上敦忠卿天慶
五年從三位權中納言
三月薨号枇杷中納言

梁女敦忠卿天慶五年從三位權中納
言或士御門
或木院西宮抄云延喜廿一年正月
於殿上元服又兼平七年四月に
頭中將とて天慶六年正月廿四日内
宴中納言とて大饗とあり中納言と
あり極のや服とあり

の今昔物語の時平の國經のや酒
の傳りし世説の母君の時平の
その説をいふものなりと云ふ
生達 如と云ふ

中納言朝忠

あやめ絶る形の中へふさぎを恨み

拾遺集 天曆御時分食

宇比呂山はよみいふかゝのゆり人 或人い世中さきえく 恨めとよあるやしといふ
まういすく世中よ男共のあふふとのなえくあふふといふはふれくあふれく
あふれくあふれくあふれくあふれくあふれくあふれくあふれくあふれくあふれく
あふれくあふれくあふれくあふれくあふれくあふれくあふれくあふれくあふれく

あやめ絶る形の中へふさぎを恨み
あやめ絶る形の中へふさぎを恨み
あやめ絶る形の中へふさぎを恨み
あやめ絶る形の中へふさぎを恨み
あやめ絶る形の中へふさぎを恨み
あやめ絶る形の中へふさぎを恨み
あやめ絶る形の中へふさぎを恨み
あやめ絶る形の中へふさぎを恨み
あやめ絶る形の中へふさぎを恨み
あやめ絶る形の中へふさぎを恨み

絶る形の中へふさぎを恨み
絶る形の中へふさぎを恨み
絶る形の中へふさぎを恨み
絶る形の中へふさぎを恨み
絶る形の中へふさぎを恨み
絶る形の中へふさぎを恨み
絶る形の中へふさぎを恨み
絶る形の中へふさぎを恨み
絶る形の中へふさぎを恨み
絶る形の中へふさぎを恨み

譜

三條

公卿補任云父大臣定方公男五母中納言山陰公女朝忠天曆六年参議後

中納言朝忠

あやめ絶つて中へまふとき恨さう
拾遺集云 天曆時公余
世をたてしうきく遊かざれは海濱
ふらふと遊ふは物と云ふは
ふれぬうきうきふれぬうきうき
ふれぬうきうきふれぬうきうき
ふれぬうきうきふれぬうきうき

絶え極めしうきうきふれぬうきうき
ふれぬうきうきふれぬうきうき
ふれぬうきうきふれぬうきうき
ふれぬうきうきふれぬうきうき
ふれぬうきうきふれぬうきうき
ふれぬうきうきふれぬうきうき
ふれぬうきうきふれぬうきうき
ふれぬうきうきふれぬうきうき
ふれぬうきうきふれぬうきうき
ふれぬうきうきふれぬうきうき

譜

三條

公卿補任云父大臣定方公男五母中納
言山陰公女朝忠天曆六年参議從

大和物語より多し中略とあり

△應和三年中納言康保

四位上

四十三 西宮村同年左
中將と為補任職文苑

同十一年

書

衛門督

為使別當天德五年

二月改爲
應和元

正四位下同十一

月夢

五十一号土御門
中納言又提

中納言又提

の今昔物語云三條中納言と云ふ人ありて
三條右大臣の所より才のあふる人
のひきよめ給ふなりと云

謙德公

あはれもいふ事人かたて我にうはぬ事
 極道果意とておきく曲後うて
 侍りて更なるを侍りて 一條校
 出れ今更つてなるぬれ我も意死ぬ
 へき何ゆゑもえし持てを新めれとい
 ひおれたといふ人となめ清くなりけ
 し今更に死もあをれといふ人世は是
 え死にて捕りておひ死をあるを（西）と
 おもひて或説あるとおもへてと子も相
 似たりあるが故にかし遠あり是世に

謚謙德公封三河國號二條桓政

以上諸記一同

吾根好忠

由良のしほり人うをたて万をぬき

新多集意一とく次

先及隈井小井町の

海すも海ありの境なせさうは海なり

我意あてとてあてはあてのあて

あてのあての中は境とあてはあて

とてあては境とあてはあて

あてのあては境とあてはあて

あてのあては境とあてはあて

あてのあては境とあてはあて

あてのあては境とあてはあて

あてのあては境とあてはあて

あてのあては境とあてはあて

あてのあては境とあてはあて

此後探の秋小井町の秋
何れと小井町の秋
あてのあては境とあてはあて

アサヒラキゴキテリ
朝開榜書我者陽羅前とよし
も此伊

入行幸以時之

初より仲長記より白虎門
至向津野大湊為東門
以名龍屋大湊為西門
之又明石大湊とて此は
門と云

○やといふがより上略え海門水門の
万々其先十七大湊川門多す天漢川
門座而も古び外記多し後の事とて
俗説と傳れざるものなり
○や二万葉集よりと見えゆと訓
則ち此の字は假字なりと云は
此集と云ふ事なれども其
の事なりとておもひて誤り

譜

初より仲長記より白虎門
多すと好忠の父祖
と云

曾根連ハ姓氏録云神饒速日命六世
孫伊香我邑雄命之後也天武十三年三
月紀之曾根連韓大等授小錦下位と云
け高き親命好忠父祖末詳丹後掾と
いり云々是より好忠の父祖と云ふ
事なり是より好忠の父祖と云ふ

惠慶法師

八重葎三まゝの宿の所かに人能く秋の葉を
拾はば秋の葉の如く荒れ宿の葉を
人よ人よとみゆる

是の如く荒れ宿の葉の如く宿の葉を
拾はば秋の葉の如く荒れ宿の葉を
人よ人よとみゆる
とみゆる宿の葉の如く宿の葉を
拾はば秋の葉の如く荒れ宿の葉を
人よ人よとみゆる
とみゆる宿の葉の如く宿の葉を
拾はば秋の葉の如く荒れ宿の葉を
人よ人よとみゆる

是の如く荒れ宿の葉の如く宿の葉を
拾はば秋の葉の如く荒れ宿の葉を
人よ人よとみゆる

同人の如く宿の葉の如く宿の葉を
拾はば秋の葉の如く荒れ宿の葉を
人よ人よとみゆる

八重葎三まゝの宿の所かに人能く秋の葉を
拾はば秋の葉の如く荒れ宿の葉を
人よ人よとみゆる
とみゆる宿の葉の如く宿の葉を
拾はば秋の葉の如く荒れ宿の葉を
人よ人よとみゆる
とみゆる宿の葉の如く宿の葉を
拾はば秋の葉の如く荒れ宿の葉を
人よ人よとみゆる

詩歌より中ノ貴人ノ言ハスル如キ事
ト云ハルモノハ此ノ如キ事ナリ

譜

父祖未詳

源氏

凡ソ世ノ事ハ此ノ如キ事ナリ
詞曲集ニ於テハ此ノ如キ事ナリ

秋草堂詩集

此ノ如キ事ナリ
凡ソ世ノ事ハ此ノ如キ事ナリ
詞曲集ニ於テハ此ノ如キ事ナリ
秋草堂詩集

又

聖徳太子の遺詔水投石

雨窓者瀧谷山河石觸目之権情

者不持

七

いりて器用のまうくしとたり人々せん
は二箇の思ひはききとていふ人料へ
巧きあり確ちとせり

譜

祖父貞元親王清和皇子父醍醐從五位上侍從兼
信大系圖重之河或説云冷泉院東文の時
帶刀ことりとあり帯刀の長々又言ま
ず力えはり時春文の希免しとれとる百首
のふありその中二老婦どりけふとてふあれ
けり芳人といふ陸奥國官よりとるなり

なり一傳の秋の市に重なりけり
奥玉一けり一とありとていふ人
ふありとていふ人ありとていふ人
のふありとていふ人ありとていふ人
けり大系圖とありとていふ人
けり大系圖とありとていふ人

大中臣能宣

御墻より遠くありて
空高く物なり

詞苑集卷
七

[illegible]

いふべきなりとのつとひて上へかゝる
例之は蜂のあよりや且諸に
長く集り我こそと解く所の諸人深氏
物語よきといふけり然らばさうなる
しむべきなりと解る義ありてわが
時めくは後世なり

かく吾邦と志すは親おみ入るは皆め痛き
 第三の以下あれは似てゐるをば別へ
 御座るといふ條を按ふ門と門の乃の境と
 御座るといふことを茲に因するもの付れり

火と焼く^{火と焼く}之を衛令之理門至夜燃火
失火
義解之謂内及中外三門
 其竈皆令衛士炬火閣門亦同
其竈
 且諸其佐國之軍國といひて良民
之
 の中より軍といふと軍といふと
軍國より大教小教校尉主帳
 之を各々といふと
軍國より大教小教校尉主帳
 の中より軍といふと軍といふと
軍國より大教小教校尉主帳
 有遺之と防人といひて三年
交替
 其の中より中世より新より中世より中世より

譜

父神祇大輔祭主賴基也 能宣朝臣
 祭主四位也大中臣朝臣按日本紀續
 日本紀等始大織冠中臣連鎌子藤原
 の氏と賜一子といふと其子藤原と稱
 すを藤原文武天皇御時御事小供する
 といふ事申すに及ぶより勅ありて藤原
 意更廣又中世より意更廣なる男
 臣藤原氏は天皇慶長二年中世より

任一又大寺と稱りて大寺と稱せり仁壽

宝龜三年大寺は任一以後其嫡流ハ大寺と

稱せり在任云是是稱多と稱するの

之今或仍系ハ福江の子とす是ハ後ハ福江と云ふ人

入との仍也とす也中江の系ハ國土の孫國土の子とす

是子ハ意英無名とす也中江ハ意英無名福江の嫡流

後世ト部氏と稱して傳説とす也

といふ一神と云ふる宮の中ハ中江は

と宣命初ハ部氏と稱せりと云ふト部ハ

只部トと云ふト部ハ又或説ハ部氏

と改てト部と稱せりといふト部の氏姓

の部と云ふ人後ハ天武天皇十三年

十氏の姓とハ云ふ也其時其人と第一

と第二と云ふ姓ハ部氏ハ貴姓ト部ハ

部氏ハ部氏の姓と云ふといふ也

の中江部氏ハ部氏ハ部氏ハ部氏ハ

人氏部氏ト部氏ハ部氏ハ部氏ハ

部氏ハ部氏ハ部氏ハ部氏ハ部氏ハ

部氏ハ部氏ハ部氏ハ部氏ハ部氏ハ

部氏ハ部氏ハ部氏ハ部氏ハ部氏ハ

部氏ハ部氏ハ部氏ハ部氏ハ部氏ハ

此の物もつては、あつた古き木
見せ、人々をけしきとて、おれも
知れ、いふ、源の古き、いふ、鏡とて、
此の、いふ、物、いふ、いふ、いふ、
の、いふ、天、いふ、いふ、いふ、
いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

殊永義孝

思ふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

後、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

あ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

